

## おばあちゃんの命

(原文)

湯本 梨里愛 (12 歳)

茨城県

常総学院中学校・高等学校

多くの人々が亡くなった戦争が終わり、日本は平成という時代を迎える。平成時代はネットワークが広がり、便利なものが増えた。そして、令和。令和 2 年、私たち、誰もが経験したこともないようなパンデミックが起きる。新型コロナウイルスという憎きウイルスが原因である。そんな世界の中、一つの悲しみをのりこえた一人の少女がいた。彼女は、ある日突然、お母さんにこう告げられた。

「おばあちゃんがね、コロナに感染したんだって」と。少女は、耳を疑った。だって、つい先月に会った時は、すごく元気だったおばあちゃんが感染するなんて。信じられなかったのである。少女は、おばあちゃんの容体を聞いた。するとお母さんは、「重症だって。治るかどうかも、分からないって。だから、私たちも気をつけなくちゃよ?」。重症、治るかどうかも分からない。少女は、お母さんの言葉が信じられなかった。おばあちゃんは、少女が幼いころからよく世話をかけてくれて、よく戦争の話をして、「戦争なんぞしてはならん。あんた、よくお聞き。人の命はな、奪おうとすれば、簡単なんだよ。でもな、一つの命には、お母さんとか、お父さんとか、友だちとか、今まで食べてきた命たちの心が詰まるとるんよ。いい?」。そう言って、耳にたこができるくらい言うのです。おばあちゃん。死んじゃうの。と、心の中で何度も問いかけた。

次の日、お母さんは言った。「もう人工呼吸器の数が足りないから、おばあちゃんがつけているのをはずして、若い人に交換したいって、言ってたよ」と。少女は、ふざけるなと思った。なんで、若い人の命のほうが大切なのか、とも思った。若い人のほうが国や人のためになるからだろうか。命の尊さは平等じゃないのか、とも。

少女はこんなとき、1 つのカードを見つけた。おばあちゃんが書いた臓器提供意思表示カードである。また、こんな手紙もそえてあった。「私が病気になって、治らなかったとしても、人のために死ぬるようにしたい」と。おばあちゃんは、どんなことを考えて手紙を書いたのだろうか少女は考えた。本当かどうかは分からないが、「自分の命を最後まで無駄にしたくない」という様に感じとれた。少女は人工呼吸器をおばあちゃんが交代することに向き合った。おばあちゃんならきっと交代する、と言っていたら。後日、おばあちゃんは帰らぬ人となった。

悲しかった。もう、あの優しい声が聞こえなくなるのはさみしかった。おばあちゃんは戦争を経験しているから、人を失うつらさを小さいときから知っていたのかもしれない。命はたったの一つしか

い。命を失うというのは、もう二度と生きられないということ。未来がないということ。おいしい食べ物を食べられないということ。友だちと、家族と話せないということ。笑えないということ。夢や希望が持てないということ。価値観の違いはあったとしても、命は大切にすべき。そして、命は、赤ちゃんだとしても、若い人も、お年寄りの方も、動物だって、魚だって、虫だって、植物だって、みんな平等に、尊いものであるべき。と少女は感じた。

少女は、おばあちゃんのような病気にかかった人たちを助けたいと考え、医者になると決心した。  
ありがとう。おばあちゃん。おばあちゃんの分まで、元気に生きるからね。